

◎『京都新聞』11月14日、朝刊

文化

国際会議などに参加した際に「京都から来た」と言つて「ああ、京都議定書の京都ですね」と透きかされることによくある。日本通の外国人であれば、古都としての京都を思い浮かべることもできるのだが、国際社会における京都の理解のされ方は、徐々に変わってきているようだ。

私は伝統ある古都として京都が理解されていないことを嘆いているのではない。むしろ一九九七年に採択された「京都議定書」が、温室効果ガスの排出規制のための世界的モデルとして広く意識されていることを誇らしいときえ思っている。その目標達成が危ぶまれていることは嘆かわけしいが。

現代世界には、地球温暖化にかぎらず、深刻かつ複雑な問題があふれている。複雑な問題を着実に解決していくためには、どの分野においても先導するモデルが必要だ。環境問題と並んで、二十一世紀の人類に重くのしかかっている問題の一つはテロや戦争だろう。そこに宗教的イデオロギイが絡んできた場合には、いっそう厄介である。では、解決のモデルはあるのか。

近年よく語られるのは「二神教VS多神教」モデルである。それによれば、世界中の紛争のほとんどはユダヤ教・キリスト教・イスラーム教といった一神教に原因があり、また、今日の環境破壊は西歐キリスト教の人間中心の自然理解に由来するといふ。他方、仏教や日本の伝統的多神教は自然を愛し、神々との争いがない。だからそこ

京も一はらむ

小原克博 同志社大教授

れからは世界に対し、日本の多神教的な精神を発信していくべきだ、というのである。この種の紛争解決モデルにおいてわたしを感じるのは、多神教の世界的貢献といった華々しい表現とは裏腹に、それが非常に内向きで自己満足的だ、ということである。一神教が多神教かという二者択一

の中で一國文明史を語るとした「いつか来た道」にもつながっていく。いずれにせよ、この種の提言は国際社会の中でのモデルとはなり得ない。

ついでに言えば、宗教のトップエリートたちをお金をかけて集め、対話の場につかせるような意味での宗教間対話にも、私は多くを期待していない。そうしたサロンの対話を何回年続けたとしても、実社会にはほとんど影響を与えないからである。平和の希求が高声に叫ばれるほど、地に足のつかない宗教の実相を見る思いがする。きわめて悲観的な言い方に

なりましたが、私は京都議定書が果たしているような先導的のシヨンを、京都の伝統宗教の中に見たいと願っている。伝統は新しいものに対して非寛容である場合が少なくない。しかし種々の分かれた伝統を再接近させ、よい意味での摩擦エネルギーを新しい世に注ぎ込むことができたならば、何が麥わり始めるのではないか。今年七月、大谷・高野山・種智院・同志社・佛教・龍谷の各大学院(大学)が協力して京都・宗教系大学院連合が設立された。次世代の宗教指導者や研究者を共同して育てていくという目的をそこ

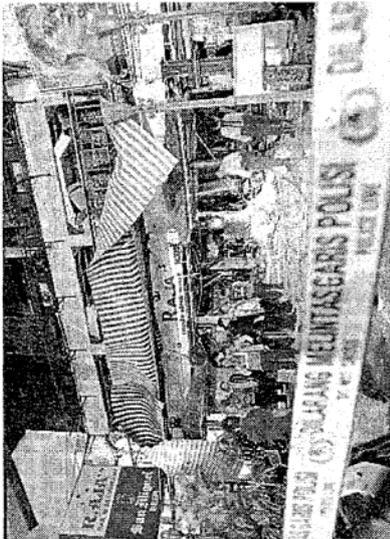
宗教間対話 京都モデルは可能か

摩擦の中で次世代育成を



こはら・かつひろ氏 1965年大府生まれ。同志社大学院神学博士課程修了。神学博士。専門はキリスト教倫理・宗教倫理学。生命倫理・エコロジーなど多様な学問領域を切り口に現代社会が直面する課題に取り組む。

は、日本社会には「わかりやすさ」という快感を享えるかもしれない。しかしこうしたメッセージは同時に誤解・偏見・差別を助長しているのではないか。また、神々の「国日本」を一神教と安易に対置させることは、「文明の衝突」という世界図式を前提とし(大東亜VS西洋)



10月1日、インドネシア、パルム島で起きた爆弾テロ(ロイター共同)

にはある。百二十年前、同志社が京都の地に設立されたときには、キリスト教に対する仏教からの敵対心は非寛に強く、新島襄は批判の矛先をかかわすので精いっぱいであった。そうした時代から見れば隔世の感があるが、それぞれの伝統の中に時代の要請に応えようとする機運が芽生えたからこそ、大きな決断がなされたのだと思う。

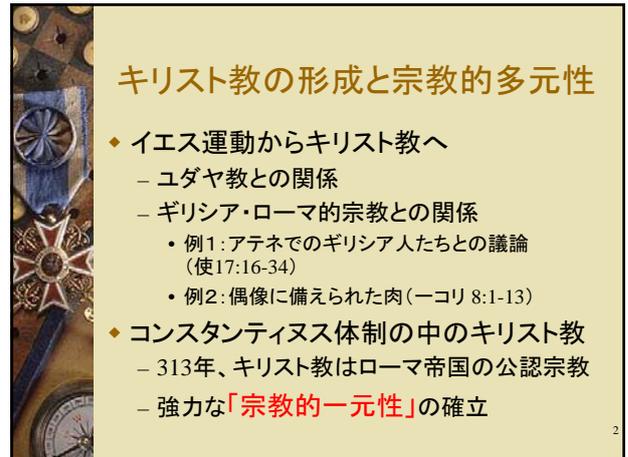
人を種々草たる土壤としての京都その可能性を信じ、努力を惜しまないなら、宗教間対話の京都モデルは、世界に対しユニークな貢献を果たすに違いない。

京都ゆかりの文化や研究者に、社会や文化の事象について考察してもらいます。月曜に随時掲載。



宗教の神学

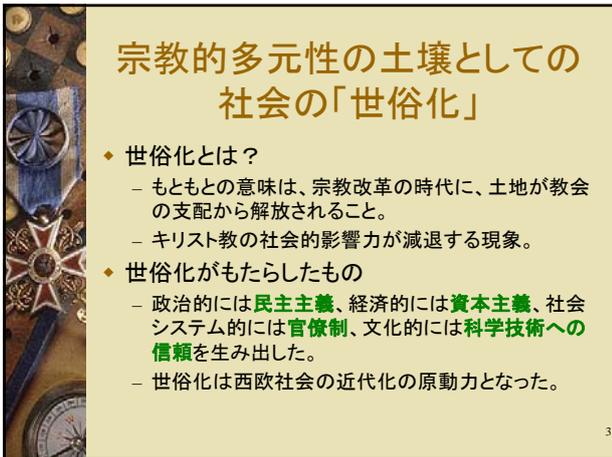
宗教的多元性に対する
神学的応答



キリスト教の形成と宗教的多元性

- ◆ イエス運動からキリスト教へ
 - ユダヤ教との関係
 - ギリシア・ローマの宗教との関係
 - 例1: アテネでのギリシア人たちとの議論 (使17:16-34)
 - 例2: 偶像に備えられた肉(一コリ 8:1-13)
- ◆ コンスタンティヌス体制の中のキリスト教
 - 313年、キリスト教はローマ帝国の公認宗教
 - 強力な「**宗教的一元性**」の確立

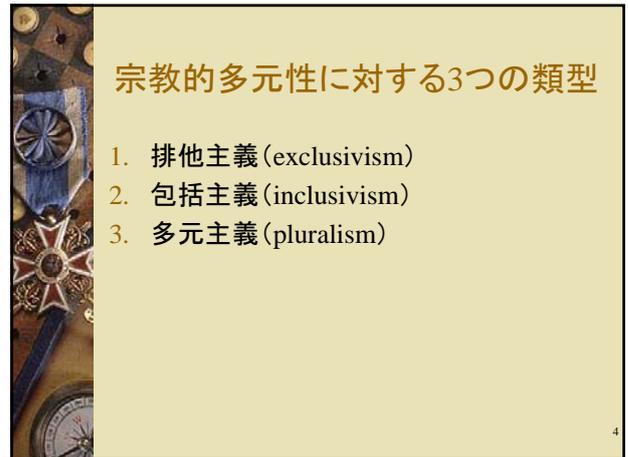
2



宗教的多元性の土壌としての 社会の「世俗化」

- ◆ 世俗化とは？
 - もともとの意味は、宗教改革の時代に、土地が教会の支配から解放されること。
 - キリスト教の社会的影響力が減退する現象。
- ◆ 世俗化がもたらしたもの
 - 政治的には**民主主義**、経済的には**資本主義**、社会システム的には**官僚制**、文化的には**科学技術への信頼**を生み出した。
 - 世俗化は西欧社会の近代化の原動力となった。

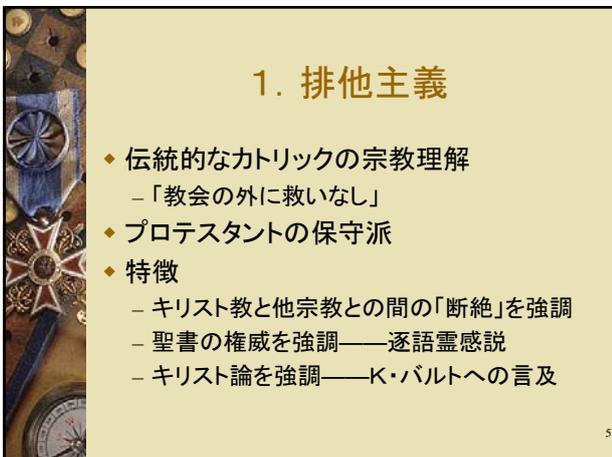
3



宗教的多元性に対する3つの類型

1. 排他主義 (exclusivism)
2. 包括主義 (inclusivism)
3. 多元主義 (pluralism)

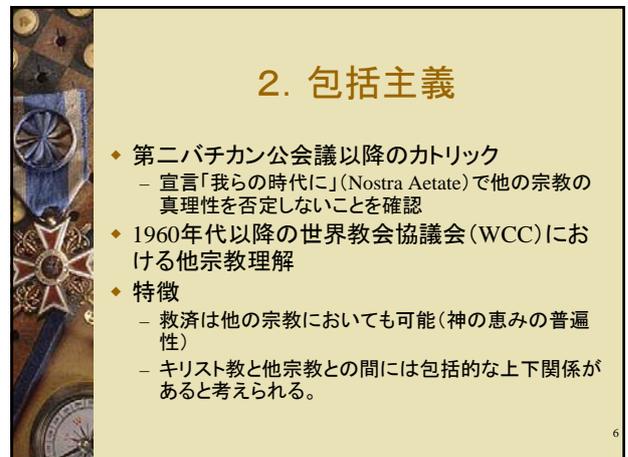
4



1. 排他主義

- ◆ 伝統的なカトリックの宗教理解
 - 「教会の外に救いなし」
- ◆ プロテスタントの保守派
- ◆ 特徴
 - キリスト教と他宗教との間の「断絶」を強調
 - 聖書の権威を強調——逐語靈感説
 - キリスト論を強調——K・バルトへの言及

5



2. 包括主義

- ◆ 第二バチカン公会議以降のカトリック
 - 宣言「我らの時代に」(Nostra Aetate)で他の宗教の真理性を否定しないことを確認
- ◆ 1960年代以降の世界教会協議会(WCC)における他宗教理解
- ◆ 特徴
 - 救済は他の宗教においても可能(神の恵みの普遍性)
 - キリスト教と他宗教との間には包括的な上下関係があると考えられる。

6

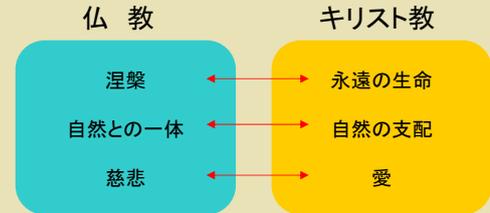
包括主義の例(1)

- ◆ カール・ラーナー
 - 「匿名(無名)のキリスト者」
 - 諸宗教の存在意義はキリスト教との一致の程度によって計られる。
- ◆ ハンス・キュンク
 - 世界平和の視点から宗教間対話の必要性を説く。
 - 異なったパラダイムが同時に存在している状況が、宗教内の紛争と宗教間の紛争の一因となっていると考える。
 - エキュメニカルな真理基準
 - 人間的であること(das Humanum)

7

包括主義の例(2)

- ◆ パウル・ティリッヒ
 - 晩年、M・エリアーデと宗教史に関する共同のゼミを持つ。キリスト教と仏教の対話にも関心を向ける。



8

3. 多元主義

- ◆ 宗教的多元性は恒常的なものであり、それはいかなる単一の宗教にも取って代えられることはない。
- ◆ 諸宗教の中には固有の真理契機がある(ただし、すべての宗教が救済的意義を持っているわけではない)。
- ◆ いかなる宗教も、最終的・絶対的・普遍的な真理を保持していると言うことはできない。
- ◆ キリスト教信仰にとってイエスは独特の意味を持っているが、その独自性は排他的な形で優越性・超越性と結びつけられるべきではない。

9

多元主義の例

- ◆ 倫理的・実践的動機づけから
 - 宗教多元社会において絶対的な真理主張を行うことは非倫理的であると考える。
 - 解放の神学、フェミニスト神学からの影響
 - P. ニッター、R. R. リューサーら
- ◆ 宗教哲学的・理論的動機づけから
 - ジョン・ヒック:「実在者」「究極者」
 - レイモン・パニカー:複数の神的実在者

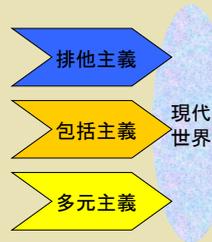
10

3つの類型の相互関係

- ◆ 多元主義者による進歩史的理解



- ◆ 世俗化・グローバル化する世界の実情



11

宗教間対話の課題と展望

- ◆ 理論的な共通基盤を求めると、「宗教経験」の場(トポス)を共有すること。
- ◆ 神論および「神の国」の再解釈。救済の現実への視点(特に抑圧された者に対する視点)。**解放の神学**からの洞察。
- ◆ 人間論の展開。特に**フェミニスト神学**との関係において。
- ◆ 終末論的な知恵。「唯一性」の体験的洞察。「絶対性」のリハビリテーション。

12